

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第10回 ウガンダ独立後の歴史の刻みとなる数字「6」

皆様ゴールデンウィークをいかがお過ごしになりましたでしょうか。ここウガンダは、この時期5月1日がメーデーで祝日となっています。多くの労働者は土曜日も働いていますので、今年は日・月曜日と二連休になりました。ウガンダの人々にとって重要な連休といえば、4月中旬に当たったイースター休暇：4月14日(金曜日)～17日(月曜日)の四連休だったことでしょう。この辺の状況はキリスト教国が多い欧米諸国とあまり変わりないと思います。

今回のカンパラ通信では、ウガンダの独立後の歴史について扱ってみます。ウガンダがどんな国かさえもなかなかイメージがつかめないのに、何故とお思いになる方もおられるでしょう。「映画の中のウガンダ」という前回のカンパラ通信の中でもウガンダの歴史を若干紹介してもらいましたが、今回この題材を選んだのは、こちら地元の週刊誌の昨年10月7日号にウガンダ独立54周年に絡んだ記事を再読し、興味を引かれたからなのです。因みにウガンダが独立したのは1962年10月9日です。

私は4月のイースター休暇を利用して久しぶりに大使館の執務室の書類整理をしました。その時に週刊誌の記事のコピーを見つけ、面白そうなので読み返してみたところ、ウガンダ独立後の歴史を形作った事件が10年毎に末尾に「6」のつく年に起こったという内容でした。こういう形でウガンダの歴史を振り返ってみるのも面白いと感じ、今回はこの記事の流れに沿ってウガンダの歴史を刻んだ事件・事象を紹介させていただきます。



(歴代大統領)

独立前のウガンダは、長く英国の保護国となっていました。英国による植民地という直接統治ではなく、ウガンダの中で最も統治が整っていて最大の領地を占めていたブガンダ王国の影響力を利用した形で英国が支配していました。そのためウガンダという名前もこのブガンダ王国に由来されているとされています。さて、この記事では、東アフリカ全体を見回してみて何がウガンダをユニークな国にしているかという、独立後の54年間に9人もの大統領が就任したということ挙げられています。同じ頃に独立を達成した東アフリカの他の国では大統領を3人又はせいぜい4人輩出しているのと比べての話です。さらに注目すべきは、そのうち過半数の5人の大統領は武力でこの地位に就いたこと、同じく5人の大統領が武力でその地位を追われたということも述べています。しかし、この54年間といっても、後述する1986年からの30年間はムセベニ大統領の下で安定を享受していますので、「独立した1962年から1986年までの24年間に8人の大統領が就任し、そのうち4人の大統領が武力でこの地位につき、同じく5人の大統領が武力でその地位を追われた。」と言い代えてもよいこととなります。因みに武力で大統領の地位に就いた者全員が武力で地位を追われました。ウガンダはそれだけ血塗られた混乱した時代を経験してきたということになります。

1962年、英国支配の間も国内的に大きな影響力を有していたブガンダ王国の国王のムテサ II 世が大統領となり、共和主義者のオボテが首相となって独立ウガンダが誕生しました。

1966年5月、路線の違いからムテサ II 世大統領と反目するようになっていたオボテ首相は軍を使ってブガンダ国王の王宮に攻め入り、ムテサ II 世は命からがら逃走し英国に亡命しました。大統領となったオボテは翌67年に共和国制の憲法を制定し、事実上一党独裁で権力を揮いました。しかし、このオボテ政権も長くは続かず、1971年にアミン軍司令官のクーデターにより転覆されます。大統領となったアミンですが、オボテ前大統領より残忍性を発揮するにつれ、ウガンダ人からも国際社会からも嫌われ、孤立していきま



(エンテベ空港急襲作戦)

1976年7月、こうしたアミン大統領に対する怒りが最高点に達し起こったのが、PLOにハイジャックされた旅客機の乗客を救出するイスラエル軍によるエンテベ空港急襲事件です。この事件をきっかけにアミン政権の存続は時間の問題となり、1979年4月にタンザニア軍と亡命ウガンダ人武力勢力との合同作戦でアミンは追放されました。ウガンダの解放勢力はマケレレ大学で学長をしていたことのあるルーレ教授を大統領に選びますが、68日しか続きませんでした。同勢力は次に独立時に司法長官だったビナイサを大統領に据えましたが、彼も軍司令官と対立し政権は1年間しか持ちませんでした。解放勢力は軍事委員会を組織し、軍事政権を打ち立て1980年12月に総選挙を実施することにしました。選挙では、その前に帰国していたオボテ元大統領が率いる政党が勝利し、オボテが再び大統領に就任します。この選挙結果がウガンダを5年間の内戦へと誘うこととなりました。

1986年1月、激しい内戦の中から勝ち上がってきたのが現ムセベニ大統領率いる国民抵抗運動です。この抵抗運動がウガンダの大部分の領土で政治的不安定に終止符を打つことになりました。



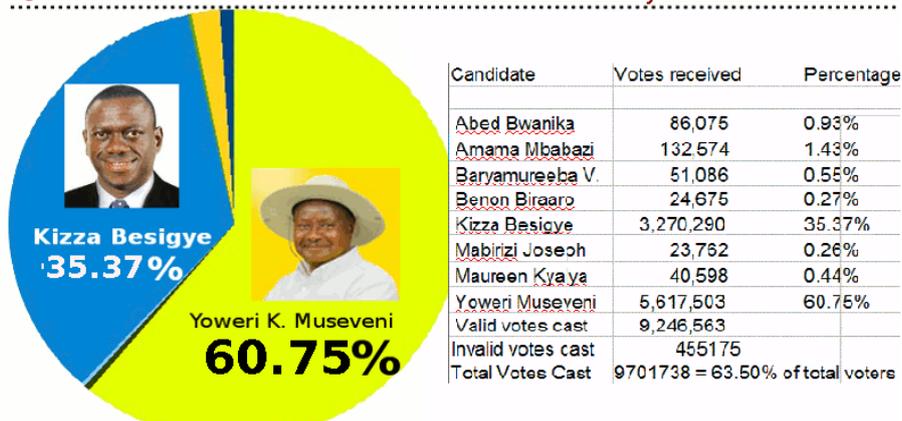
(ムセベニ大統領の就任)

1996年5月、久しぶりに総選挙及び大統領選挙が実施されました。ムセベニ大統領の指導の下で政治的、経済的、社会的改革が進められてきたウガンダですが、1995年に新たな憲法も整えられてそれに則って実施された選挙でした。ムセベニ大統領もこの憲法に基づく国民による直接選挙で公式に大統領職に就任しました。これを機会にして以後5年毎に総選挙を行うことが根付くことになるという意味で、記事では重要な出来事と扱われていました。

2006年2月、ムセベニ政権下での3度目の総選挙が実施されました。1995年憲法では政党が禁止され、議会議員の候補者が個人の資格に限られていたのですが、2005年にその条項が改正されて複数政党制の下で実施された新しい政治的システムで国家の指導者層が選ばれたということで新時代を画するという事なのでしょう。

2016年を記事では、最後に国民投票を含む大幅な憲法改正が進められることになるかもしれないという理由から重要な年になるということで結んでいます。しかし、実際のところ2016年には憲法改正の実質的な動きは何も起こりませんでした。2016年2月の総選挙の実施手続を巡って最高裁判所が憲法改正を含む選挙制度改革の提言をしてもです。

Uganda Decides 2016: Final Presidential Elections Results Declared by the Electoral Commission



(2016年大統領選挙結果)

ここまで来てこんなことを申し上げるのは失礼ですが、この「6」で終わる年がウガンダの歴史の方向性を決定する事件が起こったというのは、こじつけに過ぎないというのが私の正直な感想です。敢えて週刊誌の記事を認めるとすれば次の二つのみです。1986年のムセベニ大統領の政権掌握が独立後のウガンダの歴史を2つに分割する最重要イベントだったこと。それに1966年のブガンダ国王の追放も当初の政治体制を根本的に変えたということから歴史的な事件と言えるでしょう。残りの1996年と2006年の両総選挙について言えば、これらの根拠となったそれぞれの前年になされた憲法制定や憲法改正の方が重要な出来事と言えます。総選挙の実施はそれらの結果に過ぎないのですから。まあ、読者に読んでもらう為の記事ならそれくらいは許してあげてもいいかなあ、とも思っています。

この話題に少し個人的なことを付け加えさせていただきます。2006年1月、筆者が始めてウガンダの地を踏んだ記念すべき年でした。2016年6月、駐ウガンダ日本大使としてウガンダを再訪することとなりました。

筆者とウガンダとの関係を考えますと「6」のつく年と縁が深いということは間違いありません。

(以上)